(一) 夫を尋ねて

人皇九十代亀山天皇の御代、鎌倉征夷大将軍宗尊親王は、時の執権時宗の非儀を忌み除かんとしたが、事前に露顕してかえつて将軍職を廃せられ都へ帰らせられた。

その頃、鎌倉武士に藤原修理大夫という者がおり、その娘に朝日姫といつて、世にも稀なる美女がおつた。

朝日姫は幼少の頃母を失い継母によつて育てられたが、継母は朝日姫の美人なることと、尊敬されていることをねたみ、ことごと姫につらくあたつた。この継母の兄にあたる人に岩渕将監という武士がいた。この人は妹とはにてもつかぬ心の優しい人で、妹のおこないにいつも注意していたが、妹の行いは改まらぬばかりか、日に日につのるばかりであつた。将監は気の毒に思い、朝日姫を自分の子息舎人にめとりあわせようと、修理大夫にはかり吉日をえらんで婚儀をしようとした。ところが好事魔多しというか、運悪く前述の騒動がおこり、親王方の忠臣将監は、主君の身がわりとなつて自害し果て、子息舎人は捕われの身となり入牢した。このとき姫は十五才になつていた。継母の苦しみから逃がれ、舎人と結婚できる日をひたすら待つていたのに、すべてが儚かない夢と消えさつたため、その歎き悲しみは大きく、ある日乳母を自室に招き「御身も知つておられるように舅は自害したいま、良人舎人は入牢せしめられ、姑は悲歎のどん底におちてしまつた。今はただ自害あるのみ、今宵自害したいと思うが、死体見苦しからざるよう御身が仕末して欲しい」といい、さめざめと泣き伏す。乳母は驚きそれは余りにも御短慮なこと、岩渕の若殿は討たれたもうたにはあらず、助命歎願をすることもできることなれば、今しばらく御辛抱して下されと、これも泣く泣くいさめたので、その場は一応おさまつた。

そして月日が流れ去つた。あるとき舎人が牢を破つて逐電したという世評が流れ出した。乳母は喜びひそかに人をつかわして調べさせたところ、その世評の本当なることが判明した。乳母は朝日姫の部屋にかけこみ、このことを姫に知らせ二人は抱き合つて喜んだ。その後若殿よりの便りでもあるのではないかとひそかに待つたが、その望みはみたされず、舎人の行方は全くわからなかつた。

ある夜、巡礼に身をやつし館をのがれる二人の人影があつた。それは姫と乳母の二人であつた。待てどもなんの便りもない若殿をたずねるべく、継母の家をのがれたのであつた。翌朝、姫の家出を知つた修理大夫は、多くの家臣に命じ八方をさがさせたが、全く徒労に終り、家臣等は重い足をひきずつて帰つてきた。

旅に出た二人はただ月日を重ねるばかりで、尋ねる人の影さえも見ることができなかつた。家々の門に立つて報謝を願つては、いささかの米や金銭を乞いあるく二人の姿は全くいたましいものであつた。姫は余りにも美人なため人目に立ち危険な状態になることも幾度かあつた。これを憂えた乳母は、姫の髪をたち顔には淡墨をぬらせ常の美を覆いかくさせた。

ある日、七里余の道を歩き棒のようになつた足をいやすべく、とある十王堂の縁に休んだ。ところが疲れのためいつしかうとうととまどろんだかと思うと、男の声に見覚めた。みると、雲助二人が立つていた。その一人が進みいで「御身達は何れに行きたもうか」と問う。乳母は「我々はみらるるとおりの巡礼、何処といつて定まりたる旅ではない」と、答えると、重ねて雲助は「この先の町は広大なる家数あり、慈悲深き人々が住んでいるが、ここから三里程あり、山川あり、道はあるがとても難渋な山路にして、旅人はみなこの辺より駕籠を使つて町に入るが、御身達も駕籠を使用した方がよいと思うが、安くしておくからどうだ乗つて下され」という。乳母は、「巡礼の身として駕籠を使うことはできない」と断つたが、「今日は親の命日であるから、善根のため、後生のため、無銭でもよいから」としつこくいい寄るので、乳母は姫をうながし十王堂をでて歩みだした。雲助達はあきらめたようにそれを見送つていたが、ものの一丁とも行かぬうちに、雲助達は追いつき姫をおさえ無理に抱き駕籠におしこめかけ出した。乳母は手のほどこしようもなく、駕籠を追つてかけた。駕籠は本道をそれ杉林の中なる細い道に入りぐんぐん進んでゆく、乳母は大声をあげ助けを求めながら走るが、山中のこととて人もなく全くとほうにくれるばかりであつた。それからしばらくして大丈夫と思つたのか、雲助達は駕籠をおろし、姫を引き出し「巡礼をして貰い集めたる金をもつていることだろう。その金を全部だせ、命だけは許してやろう」とおどす。ようやく追いついた乳母は、さて金銭がめあてであつたかと思い、いそいで袋ごと渡した。雲助はそれを調べていたが「これ程難儀してこればかり貰いあるくよりは、大金をもうける方がよいだろう。我々は人をかどわかし物や命をとるものなり、命が惜しかつたら我々に身をまかせよ」と、無体にも犯さんとせまる。二人は生きた心地もなく大声をあげ助けを求めたが、かえつてくるのはこだまばかりであつた。雲助が声が高いと手拭いをもつてさるぐつわをはめ手込めにしようとしたとき、林の小道よりりつぱな武士が一人の家来を連れ突然現われ、大音をあげて雲助どもの不法の働き免じ難し、手討になさんと太刀に手をかけ抜打ちいたさんとする。その勢いを恐れた雲助はあわてふためき一目散ににげだした。武士は家来に命じて二人のいましめをとかしめ、いろいろと介抱してくれた。二人は地獄に仏とはこのことかと、武士にむかい合掌して命の恩人なりと厚くお礼し、嬉し泣きに泣きむせんだ。